

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320062

研究課題名(和文) モダニズムの越境性/地域性 近代の時空間の再検討

研究課題名(英文) Globality and Locality in Modernist Literatures: Reconsidering the Chronotope of Modernity

研究代表者

中井 亜佐子 (NAKAI, Asako)

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：10246001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、モダニズム研究を地域および時代横断的に展開することによって、越境性と地域性の相互関係を分析し、従来のモダニズムの時代区分を再検討しつつ、近代の時空間にかんする理論構築を行った。より具体的には、(1) 英米の正典的なテキストを、精神分析的および歴史的観点から批判的に精読することによって、モダニズム・モダニティの理論構築を行う、(2) マイノリティや(旧)植民地地域の複数化されたモダニズムを研究し、近代の時空間を理論的、実証的に再検討する、(3) イギリス、北米のモダニズム研究者と研究交流を行い、新しいモダニズム研究のネットワークを構築する、という3点の成果を挙げることができた。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to reexamine the concept of modernism both from the special and temporal perspective. For that purpose, the members of the project, with the help of international co-researchers, worked individually and collectively to analyze the interrelations between locality and globality, and to construct a new theory on the chronotope of modernity. The main methods and outcomes are as follows: 1) theorizing modernism and modernity through critical close readings of canonical texts from the psychoanalytical as well as historical perspective; 2) reconsidering the chorotope of modernity by working on pluralized modernisms (i.e., texts of minorities and/or (post)colonial texts); 3) constructing a research network of transnational modernist studies by organizing lectures, symposiums and research workshops in cooperation with British and North American scholars.

研究分野：英文学、英語圏文学、批評理論

キーワード：モダニズム ポストコロニアル批評 精神分析 アメリカ南部文学

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初のモダニズム研究には、(1) 空間論的展開と地域性の再評価、(2) 時代区分の再検討、という二つの傾向があった。(1) にかんしては、そのさきがけとしてポール・ギルロイの『ブラック・アトランティック』(1993年)が挙げられるが、2000年代以降はモダニズムの複数性が主張され、グローバル・モダニズムをテーマとする論集が英語圏では相次いで出版された。同時に、ジェド・エステの『縮小する島』(2004年)に代表されるような、1930年代の文学テキストを「帝国の縮小」や「人類学的展開」というかたちで、地域性を重視して論じ直す傾向もあった。

こうした研究は一定の成果を挙げていたが、とくに理論的な枠組みにおいて、(1) 世界システム論的な中心 - 辺境モデルを援用するにとどまる、(2) モダニティの時空間を十分に概念化できていない、などの問題点があった。また、日本におけるモダニズム研究は長らく国民文学の枠組みにとらわれており、新しいモダニズム研究を推進するためには、そうした枠組みを超えて研究者が交流する必要があった。

そうした研究動向を踏まえ、本研究開始以前より、一橋大学内のイギリス、アメリカおよび(ポスト)コロニアル地域を専門とする研究者による共同研究プロジェクトとして、平成21年度から22年度にかけて一橋大学言語社会研究科研究プロジェクト「トランスアトランティック・モダニズム」が実行された。本研究はその成果をもとに、さらにイギリス、北米の研究者と研究ネットワークを構築し、モダニズム研究の新たな可能性を追究することを目指して組織された。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、以下の4点である。(1) ローカル/グローバル、個別/普遍的の二項対立を乗り越え、地域横断的な視野から地域性の問題を再考すること、(2) モダニズム研究における歴史実証主義的な研究方法を見直すとともに、マルクス主義、精神分析、ポストコロニアル批評、フェミニズムといった理論的パラダイムを再検討すること、(3) 理論的枠組みを使ってモダニズムおよびモダニティの概念を空間性と時間性の両面から再解釈すること、(4) イギリス・北米の研究者招聘を通じて、新しいモダニズム研究の国際的なネットワークを構築し、共同研究を行う基盤を作ること。

3. 研究の方法

研究方法としては、以下の3つの方法をとった。

(1) 一次資料の収集を英国図書館、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス附属図書館、米国議会図書館、シカゴ大学図書館等で行った。また、二次資料(モダニズム研究関

連図書および論文)を収集・購入した。

(2) 正典的な文学テキストおよび(1)で収集した歴史資料およびマイナーなテキストをマルクス主義、精神分析、ポストコロニアル批評といった理論的枠組みをもとに緻密に分析した。成果は単著論文および共著論集のかたちで発表した。

(3) Modernist Studies Association など関連する国際学会に参加、あるいは研究発表を行った。理論的あるいは歴史的アプローチをするイギリス、北米のモダニズム研究者を招聘し、シンポジウム、講演会、ワークショップを開催し、その成果を論集等のかたちで発表した。

4. 研究成果

(1) 理論的考察(担当: 中山)

研究成果は、1910年代・1920年代に関するものと1930年代に関するものに大別される。

1910年代・1920年代にかんする研究では以下のような課題が実行され、その成果が書籍としてまとめられた。19世紀末から20世紀初頭の美学的言説や文学のなかから、いくつかの重要な美学的主題(芸術をモデルとした身体デザイン、美の享受を基盤にした人種の再生、その享受を補完する没関心的な態度、言葉と意味との照応一致を志向するクラテュロス主義、スペクタクルやノイズ音楽を可能にする都市に対する観照的態度、表象不可能なものの表象としての崇高)を抽出すること。こうした主題的傾向を、身体文化、優生学、脱植民地化、ファシズム、帝国主義といった同時期の政治的運動を支える、あるいはそれと密接に結びついた美学的原理として再定義すること。こうした事例を通じて現れてくる政治と美学との結合、「政治の美学化」をモダニズムのヴィジョンと理念として位置づけ、さらにこの美学化に抗う力がモダニズム自体に胚胎されていることを、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』のマルクス主義的、精神分析的、カント的読解を通じて明らかにすること。

1930年代にかんする研究では、以下のような課題が実行され、その成果が数編の論文として発表された。ラカン派精神分析における「性的差異」の理論をカント哲学(純粹理性の二律背反、理性の私的使用・公的使用)に接続しつつヴァージニア・ウルフの『三ギニー』をカント的啓蒙論として読解し、その政治的意味をマルクス主義的に再解釈すること。大恐慌後の時代におけるコミュニズムのユートピアの一例として、フランク・キャブラの『我が家の楽園』を、「分配的正義」に代わる「交換的正義」の表象という視点から分析すること。1930年代に理論化された社会主義リアリズムの主要概念である「典型」を、カントの構想力論および崇高論を参照しつつ、モダニズム的「イメージ」に対立するものとして再定義すること。

(2) 複数化されたモダニズム (担当: 中井)

研究成果は、カリブ英語文学を中心とする時代・地域横断的な研究、1900~1920年代にトルコから欧米へ移住した女性のテキストの調査と分析、の二分野から成る。

ギルロイの「ブラック・アトランティック」における共同体論を批判的に検討しつつ、20世紀前半および後半以降のカリブ文学・思想を再読した。それによって欧米中心主義的な近代史や世界システム論を批判し、より重層的で脱中心的時空間を構想する形式としてモダニズム文学をとらえることが可能となった。つまり複数のモダニズムとは、モダニティへのさまざまなかたちによる応答、抵抗の表現であると考えられる。具体的にはまず、カリブ現代詩において形式の実験性とモダニズム的歴史観が批判的に継承されてきたことを、とくにガイアナ出身の現代詩人・作家デイヴィッド・ダビディーンをT・S・エリオットとの関係において分析し、論文にまとめた。次に、モダニズムの思想と歴史観にかんするオルタナティブな理論構築の一環として、トリニダード出身のマルクス主義思想家C・L・R・ジェームズの著作を初期の創作から『ブラック・ジャコバン』(1938年)を経て1960年代の文化批評に至るまでの軌跡を考察した。ジェームズはエドワード・サイードの「対位的」歴史観に影響を与えた重要な思想家であるが、その思想はいまだ体系的に研究されず著作も散逸しているが、本研究期間において「ブラック・アトランティック」の文化主義的限界を乗り越える思想をジェームズの世界革命論に見出すなど、研究の基礎を固めることができた。成果は論文、ポール・ピュールによるジェームズの伝記『革命の芸術家』の翻訳、英国のジェームズ研究者クリスチャン・ホグズバークを招聘したシンポジウムの開催によって発表した。

マイノリティによるモダニズムの研究の一例として、トルコ人女性の自伝的著作(ゼイネブ・ハヌム、セルマ・エクレムなど)と彼女らと親交のあったイギリス人女性ジャーナリスト、グレース・エリソンの著作を調査・収集した。同時代のオスマン帝国からトルコ共和国へと移行する際の女性政策の変移などの歴史的な脈を把握するだけでなく、現代のグローバル・フェミニズムのプロジェクトと関連させながら批判的に分析した。また、モダニズム的なメディア・ミックスの例としてテキストに挿入される写真に注目し、「フォトバイオグラフィー」という概念を導入して、現代における自伝の問題につなげて考察した。成果は国際学会での口頭発表、招待講演、論文によって公開した。

(3) グローカル・モダニズム (担当: 越智)

アメリカ南部文学が南部対北部というアメリカ国内の枠に留まらないところで規定さ

れていく交渉の過程について考察をおこなった。研究対象はモダニズム文学の制度化における南部知識人と第一次世界大戦後のヨーロッパの知的潮流について、新批評と精読と戦後レジームについてである。

については、南部農本主義者が、1930年代に「南部」とその文化を想像する際に、いかにヨーロッパ的なものを念頭においていたのか、またそのような南部文化がいかにモダニズム文学を胚胎しうる場として想像されていたかを明らかにした。この点については、「アメリカの白いヨーロッパ——南部農本主義者のファシスト疑惑」として発表したほか、単著の重要な一章として収録されたほか、招待講演でも発表した。また「モダニズム」をT・S・エリオットのなものに求めるという特殊な定義が生じた過程についても歴史的な検証をおこなった。南部の詩の雑誌*Fugitive*において定位されたのちに、英国の詩人口バート・グレイヴズと*Fugitive*に関わった女性詩人ラウラ・ライディングを介して、その定義が英国にも持ち込まれ、またそれが逆に輸入されるプロセスについて、またそうしたモダニズムが対ソ連の文脈において非政治性を帯びることによって、冷戦期のリベラリズムと親和性を持つことについて、単著の一部に収録したほかシンポジウムにおいて発表した。

については、第二次大戦後の大学における文学研究と新批評および精読の意義、その中等教育への影響力を国家と知の配置、産業の布置という関係から考察した。新批評と精読の福祉国家期のフォーディズムとの親和性の交差点から、第二次世界大戦後の日本の国語教育における精読の制度化を戦後の知のレジームとして定位し、その論考を「新批評、冷戦リベラリズム、南部文学と精読の誕生」として発表した。

(4) 研究ネットワーク構築

狭義の文学研究の枠を超えてモダニティの概念を追究する必要性から、思想・哲学の研究者を含めて招聘し、国内の他研究機関や他分野(フランス思想)の研究者とも研究交流、意見交換を行った。

研究協力者ダニエル・カツ教授を中心に、英国ウォリック大学英文学・比較文学研究科の研究者と研究交流を行った。具体的には、平成23年度にカツ教授を招聘し、1920年代のコスモポリタンなハイ・モダニズムの影響を受けつつ地域主義を貫いた1940年代カリフォルニアの前衛詩人ジャック・スパイサーにかんする講演会*Remaking Modernism*を開催した。平成24年度にはウォリック大学でカツ教授らが組織する研究会*Modern Commons*の第一回会合に中井が招かれ、夏目漱石『文学論』におけるコスモポリタニズムをテーマに講演した。

平成24年度に英国サセックス大学よりニコラス・ロイル教授を招聘し「脱構築研究

会」との共催で講演会を開催した。一橋大学での講演では越境モダニスト作家ジョウゼフ・コンラッドのテキストと脱構築の関係を「エクリチュールの時間」をテーマに論じた。講演会の成果はロイル教授への独自のインタビューとともに、日本語の論集として刊行した。

平成 25 年度に英国（ウェールズ）のスワンジー大学よりダニエル・ウィリアムズ教授を招聘し、講演会 Comparing Cultures を開催した。一橋大学と大阪大学で開催された二回の講演会では、ウェールズ文学とアメリカのハーレム・ルネサンス文学など他地域のマイノリティ文学間の比較を可能とする理論的枠組みの構築へとつながる議論が展開された。講演会に先立って開催されたワークショップでは、レイモンド・ウィリアムズとエドワード・サイードの思想を比較し、文化と地域性、グローバリゼーションの理論の再検討を行った。講演会・ワークショップの成果は、平成 26 年度に『レイモンド・ウィリアムズ研究』の英文号で特集として刊行した。

比較文学研究の観点からグローバリゼーション下における「ナショナルなもの」を再考するために、平成 26 年度にカナダのブリティッシュコロンビア大学よりディナ・アルカシム教授とジョン・コルバート教授（ともに研究協力者）を招聘し、講演会 National Phantasmagoria を開催した。コルバート教授はアメリカ人作家イーディス・ウォートンの「旅」をめぐる物語に逆説的に出現する「麻痺」のディスコースについて詳細な議論を展開し、アルカシム教授は南アフリカの現代作家セロ・デイカーにおける、新自由主義体制下に移植された「アーカイズム」としてのモダニストの実験性を論じた。

平成 26 年度に英国の政治哲学者ピーター・ホルワード教授（キングストン大学）を招聘し、立命館大学先端総合学術研究科との共催で講演会を開催した。一橋大学で行われた講演「自己決定と政治的意志」では、モダニティの概念をその起源にある啓蒙思想に遡り、ルソーの一般意志の概念の再評価が行われた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

越智博美、「絶望しつつ希望する - 冷戦小説としての寓話」、『フォークナー』第 17 巻、2015、刊行予定、査読有

Asako Nakai, “Shakespeare's Sisters in Istanbul: Grace Ellison and the Politics of Feminist Friendship”, *Journal of Postcolonial Writing*, vol. 51, 2015, 70-33. DOI: 10.1080/17449855.2014.983698, 査読有

Asako Nakai, “The ‘Unveiled’ Woman of New Turkey: Reading Selma Ekrem’s

Photobiography”, *Seijo CGS Reports*, No. 5, 2015, 23-36, 査読有

中山徹、「理性使用の性的差異 - 『三ギニー』あるいはヴァージニア・ウルフ版 啓蒙とは何か」、『言語社会』第 7 号、2013、138-150、査読無

中井亜佐子、「歴史を書くこと、未来を語ること - 『ブラック・ジャコバン』と『三ギニー』の同時代性」、『ヴァージニア・ウルフ研究』第 29 巻、2012、27-41、査読有

Asako Nakai, “Autobiography of the Other: David Dabydeen and the Imagination of Slavery”, *Postcolonial Text*, 6:2, 2011, 1-14, <http://postcolonial.org/index.php/pct/article/view/1257/1167>, 査読有

三浦玲二、「選択と新自由主義と多文化主義 - グローバル化時代の文学としての『ハリー・ポッター』シリーズ」、『英文学研究』第 88 巻、2011、33-47、査読有

〔学会発表〕(計 5 件)

Asako Nakai, “History and Life-Writing: Translating Paul Buhle’s *C. L. R. James*”, *One-Day Forum: C. L. R. James Today*, January 11, 2015, Hitotsubashi University (Tokyo)

中井亜佐子、「世界大戦とモダニズムの「晩年」」、『日本ヴィクトリア朝文化研究学会』2014 年 11 月 8 日、上智大学（東京都千代田区）招待講演

越智博美、「フュージティヴ詩人、南部を出る - 「モダニズム」の承認に向けて」、『日本英文学会関東支部 2014 年度秋季大会シンポジウム「モダニズム文学と知識人サークル」』2014 年 10 月 26 日、上智大学（東京都千代田区）招待発表

中井亜佐子、「サイドにおける「文化と社会」」、『日本英文学会関西支部大会シンポジウム「サイド再読 - 没十年後の遺産」』2013 年 12 月 22 日、龍谷大学（京都府京都市）招待講演

Asako Nakai, “Literature, Theory, Emotions: Natsume Soseki’s ‘Cosmopolitan’ Project,” *Modern Commons One-Day Forum: Commons, Politics, Education*, February 2, 2012, Warwick University (UK), 招待講演

〔図書〕(計 8 件)

越智博美、河野真太郎、中山徹、中井亜佐子 他、彩流社、『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」』、2015、320

ニコラス・ロイル、中井亜佐子（翻訳）、吉田裕（翻訳）、月曜社、『デリダと文学』、2014、232

ポール・ビュール、中井亜佐子（翻訳）他、こぶし書房、『革命の芸術家 - C・L・R・ジェームズの肖像』2014、396

Daniel Williams, Asako Nakai, Shintaro Kono, et al. Raymond Williams Kenkyu, Travelling Modernisms, Comparing Cultures: Daniel Williams Lecture Series, 2014, 157.

中山徹、彩流社、『ジョイスの反美学 - モダニズム批判としての『ユリシーズ』』、2014、352

三浦玲一、早坂静、越智博美、中山徹、河野真太郎、中井亜佐子 他、彩流社、『ジェンダーと「自由」 - 理論、リベラリズム、クイア』、2013、336

三浦玲一、越智博美、河野真太郎、中山徹、中井亜佐子 他、研究社、『文学研究のマニフェスト - ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』、2012、204

越智博美、研究社、『モダニズムの南部的瞬間 アメリカ南部詩人と冷戦』、2012、360

〔その他〕

「トランスアトランティック・モダニズム」
<http://gensha.hit-u.ac.jp/research/TransA/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中井 亜佐子 (NAKAI, Asako)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：10246001

(2) 研究分担者

中山 徹 (NAKAYAMA, Toru)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：60292489

三浦 玲一 (MIURA, Reiichi)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：70262920
(平成25年度まで)

越智 博美 (OCHI, Hiromi)
一橋大学・大学院商学研究科・教授
研究者番号：90251727

(3) 連携研究者

鵜飼 哲 (UKAI, Satoshi)
一橋大学大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：90213404

河野 真太郎 (KONO, Shintaro)
一橋大学・大学院商学研究科・准教授
研究者番号：3041101